

—そう、上流階級の人達に私達が会わなくてならないなら、あそこに滞在するのは当然でしょう…。(チェマ発言)

★ ★ ★ ★

チェマが出て行ったときペペはすごく怒った顔をしてスシの顔を見た。

—その女性について、彼に質問しようなんて考えが、どやって君に思いついたの？君にとってそのことは全く重要では無かっただろう。

—ボス、全てに注目しなくてはなりません、どうしてあれほど醜い男性が、ああゆう感じ(階級の)の女性にどうやって気に入られたのでしょうか？彼女は望めばすべての男性を獲得できるのに？

—君の言いたい事が良く分からない。

—チェマは醜く、たいした魅力は有りませんね、そうではありませんか？

—そうね、多分そうだろう、しかし全にとって好みがあるからね。

—なるほどそうですね、例えば私なんか貴方と7年も一緒にいるから…。

—分かった、その話は始めないで、これは別の話だ。まあ良い、少し奇妙なところがあるが受け入れよう。

—多分あの女性は誰かのために働いていたのではないのでしょうか、彼女の上司は彼女に何らかの理由で、チェマが役割りから気をそらし、ヘススから引き離すことを依頼したのかしら。

—或いは、おそらく、チェマとヘススが有産階級について単純な記事を書いていたのか、それ以上の調査をしていたのか、それを知りたかったのかかもしれないね。

—それは、正しいですね。多分その通りでしょう。

—どんな場合にせよ、明白なことは、あの有産階級の人達がヘススの殺人と関係あるのだ。

★ ★ ★ ★

ペペ レイは随分前から、有名な歌手、クラウディオ エルミタスの現在の広報担当者とかかなり仲良い友達である。ペペは思いついた、アルツロ サクリスタンに電話をしよう、マルベジの上流社会の全ての人と接触するのを助けてもらうことができる。彼に電話を掛けた。彼の秘書が出て彼に繋ぐまで少し待つて間、声楽家の知られている歌が鳴り響いている、“良い広報担当者だな、彼は”と彼は考えた。